

山梨は、
挑戦と近い。
未来と近い。

TRY! YAMANASHI!



 山梨県 × TURN S.

二拠点生活、移住、
山梨で未来に向かって挑戦する
5組のストーリー



山梨は、挑戦と近い。未来と近い。

TRY! YAMANASHI!



都心から1時間半という距離にある山梨。
豊かな山々と清流に囲まれたこの地で、
いま、新しい働き方、生き方へ
挑戦しようとする人が増えています。

文・佐藤 史親 (4-13p) 写真・砺波周平

昨年からのコロナ禍で、多くの人にワークスタイル、ライフスタイルの変化が訪れました。授業がオンラインとなった学生、出社日数が減り、リモートワークがメインとなった会社員、これを機に、働く拠点をいくつも増やしたビジネスマンなど。

いま山梨には、都心と盛んに行き来しながら、いきいきと暮らす人が増えています。農業や林業、水産業に新しい息吹を吹き込む人。東京だけでなく、日本中を行き交い、ネットワークをどんどん広げる人。テレワークを駆使して、大好きなアクテ

イビティのそばで、のびのびと暮らす人。
そんなみなさんが、山梨に魅力を感じているポイントは、おもに6つ。どれもこれまでの暮らしを大切にしながら、日々を豊かにしてくれる要素です。

挑戦したくなる山梨、6つの魅力

1 都会とのアクセスが抜群に良い

都心と地方に拠点を持つ二拠点居住の場合、都心との距離は大きなポイント。その点、山梨は、都心から、電車でもバスでも車でも約1時間半〜2時間という好立地。どんな交通手段を使っても、2時間以内というのは魅力です。近い将来開業予定のリニア中央新幹線もあります。都心から25分、名古屋へ40分。日本が、近くなります。

できる土地も珍しくありません。頻繁に行き来する場合は、リノズナブルな物件を手に入れ、自分好みにリノベーションするのも楽しいです。

4 1年を通して過ごしやすい気候

山梨は盆地特有の内陸性気候です。温度が上がる真夏でも昼夜の寒暖差が大きいです。一年を通して晴天日が多く、冬でもぼかぼかと暖かい地域も。積雪も少なく交通網がマヒするようないことも減多にあります。

5 新鮮でおいしい野菜や果物

朝採れたばかりの新鮮な野菜や果物(ぶどうや桃など)を、生産者から直接、しかも安価で手に入れることができます。さらに、自分で作ればその味は格別。家庭菜園なんて、都会ではなかなか実現できないかもしれません。

3 土地価格が安い

農村には借家は少ないですが、その代わり、土地の価格がとても安く、1坪3万円程度で入手

6 地域の人との交流

気持ちの良い挨拶から始まるご近所づきあい。都心のマンション暮らしでは、なかなかないことかもしれません。地域の行事にも積極的に参加し、友だちの輪を広げていくことで、日々の暮らしはより一層楽しくなるでしょう。その土地の歴史や文化を知ること、さらに愛着も深まります。

もちろん山梨の魅力はこれだけではありませんが、6つのポイントを見て「二拠点、いいかも」とか「週末、通ってみようかな」と思ったら、ちょっと、動いてみませんか？
おためし、やまなし。私たちはそれを待っています。

次ページから始まる、山梨で挑戦している5組の皆さんは、どんな未来を描いているのでしょうか。

山梨は挑戦と近い。未来と近い。



知恵と工夫でたどりついた 等身大のデュアルライフ

大月市

田中祥人さん

たなか・やすひと 1984年、大阪府生まれ。大学院を卒業後、銀行員として勤務している。2018年、大月市に約70坪の土地・建物を購入。妻のゆかりさんと共に、平日は都内の自宅、週末は山梨で過ごす2拠点居住を続けている。



(右ページ) 森に佇む2人の「別邸」。そばに小川が流れ、生活用水には困らない (上段右) 日なたぼっこをしたり、サイフォンコーヒーを飲んだり…。ツリーハウスの楽しみ方は無限大だ (上段左) 木のぬくもりあふれるリビング。薪ストーブで冬も暖かく過ごせる (下段右) 祥人さん自慢の工具部屋は、もともとお風呂場。ざらりと並ぶ工具は社観だ (下段中) 倉庫を改造してつくった囲炉裏。お餅や厚揚げを、香ばしく焼ける (下段左) 自作の窯でピザを焼く祥人さん。その眼は職人さながらだ

大月市を東西に貫く国道20号に別れを告げ、のどかな山あいの風景が広がる細い道を行く。森は深く入り、神秘的な空気さえ帯びてくる。清らかな水をたたえる小川をまたぐと、パンダが描かれたかわいらしい看板と、洒落た意匠の建物が見えた。クルマの音を聞きつけて、田中さん夫妻が迎えに来てくれた。

「築30年を超えて相当傷んでいたこと、2拠点居住で出費が増えることから、当初妻は反対しました。そこで、今まで週末のレジャーで使っていた金額を割り出し、キャッシュフロー表を作成。改修費用を含めても2年半でペイできることがわかり、ようやく納得してくれました」

銀行員ならではの「戦略」でゆかりさんの理解を得た祥人さんは、2018年末に物件を購入。毎週末、寝袋持参で大月に通い詰め、自分の手で少しずつ手を加えて住環境を整えた。

「もともとDIYの経験があったわけではありません。ネットなどで調べて、自分なりに考え

ながら、なるべくムダなお金を使わないように工夫しました」

湯を沸かす手間とコストがかかる風呂はあえて撤去し、近隣の温泉を利用。暖房はもともとあった薪ストーブを活用した。従量課金制の格安電力会社を選び、電気代は月に数百円。この家と大月駅を行き来する軽自動車を買っておくのは、駅前の月額4千円の駐車場だ。

翌年の初夏からは、ほぼ毎週末、2人で大月へ。ピザ窯に囲炉裏、ツリーハウスなど、祥人さんのDIYもますます本格的になった。それはまさしく、子どもころ誰もが夢見た「秘密基地」だ。

「旅行は思い出にはなるけれど、行ったらそれで終わり。こうして自分で何かをつくると、結果がどんどん積み上がっていく。それがとても嬉しいですね」

発見と感動の連続 2拠点ならではの 続けやすさ

この家を拠点に、山梨の各地に出かけるのも楽しみという。「ひと口に山梨と言っても、北杜、甲府、笛吹、河口湖…それぞれに特色がある。訪れるたびに地域のいろいろな表情が見えて飽きないんです」

近隣のもう一つ物件を取得し、通信環境の整ったテレワーク拠点をつくる「野望」もある。デュアルライフをしなやかに楽しんでいる祥人さんの「トライしたい」という心の火は、消えることはなさそうだ。

好きになった土地で創造する 自分に合ったライフスタイル

身延町

幡野寛人さん

はたのひろと 1993年、群馬県生まれ。都内で営業マンをしていた2016年、身延町の地域おこし協力隊に任命され移住。町内産大豆100%のドリンク「ソイコティ」を商品化し、協力隊の任期終了後も同事業を運営している。

身延町のまちなみは、甲府盆地から駿河湾へと注ぐ富士川に沿うように広がっている。その清流を望む原地区の高台に、幡野さんの「焙煎所」はある。もともと小学校だった建物の一角に、香ばしい豆の薫りが満ちる。「ここはもともと放送室。注文を受けてから、そのつどここで焙煎しているんです。よかったら、飲んでみますか？」

「ソイコティ」と名付けられたそのドリンクの原料は、町内産の「あけぼの大豆」。まん丸で大きな粒、噛むほどに広がる甘さが特徴だ。これを焙煎して粉末にし、小鍋で短く煮出す。ふくよかな香りとコクのある味わいは、じんわりと身体にしみわたる。県内外にファンがいるというもうなずける。

「無理しなくていい」「自然体でいられる」「街の魅力に惹かれ移住」
2016年のお盆、幡野さんは身延町に初めて降り立った。町内の毛無山(1946m)に知り合いと登るためだ。しかしその「知人」とは、7月に出会ったばかりだった。その年、都内でOA機器の営業をしていた幡野さんは、地方への移住を模索していた。「いずれは故郷の群馬に帰るつもりでしたが、その前に、まったく知らない地域に住んでみようと考えて。そんなとき、友人の誘いで山梨を訪れることに。行くのは数ヶ月先でしたが、山梨のことを調べるほど、『どんな人がどんな暮らしをしているんだらう』と興味が湧きました」

思い立ったが吉日。東京・有楽町の「ふるさと回帰支援センター」へ、さっそく移住相談に出かけた。その日たまたま地域おこし協力隊の募集で訪れていたのが、身延町の職員だった。「正直、身延という町の名前も知らなかった(笑)。ひととおり話した後、『お盆に山へ登りませんか』と誘われました」

日程は2泊3日。職員に連れられて、身延山久遠寺など町内の名所も案内してもらった。

「営業マンということもあり、町の方に積極的に話しかけたんですが、反応はわりと薄くて(笑)。でもそこで『ああ、この町では無理してしゃべらなくてもいいんだ。ぼーっと風景を見てたりしていいんだ』と、居心地のよさを感じたんです」

自然体でいられる、この町の不思議な魅力に惹かれた幡野さん。帰京してほどなくして、地域おこし協力隊員に応募することを決意した。

ソイコティが つなぐ
人との縁を大切に
「ずっとこのまちで」

採用はすぐに決まり、10月に町内へ移住。任務は、特産の「あけぼの大豆」を使った地域活性化だった。もともとお茶やコーヒーが好きだった幡野さんは、大豆を焙煎することを考えた。「すでに全国各地に『大豆コーヒー』はありました。しかし、おいしいと思えるものがなかった。やはり本物のコーヒーとは味わいが違うし、飲み口もあまり良くなかったんです」

たどり着いた答えは、大豆(SOY)の甘みを生かした、コーヒー(CO)のように薫るお茶(TEA)のように飲みやすい「ソイコティ(SOYC OTEA)」。2018年に商品化にこぎつけた。改良を重ね、リピーターも増えている。「周囲の人たちと一緒に考えながら開発できたのは大きかったですね。話をちゃんと聞いてくれる町のみなさんがいたから、チャレンジできました」

協力隊の任期が終了した後は、甲府市内の企業でシェアスペースの運営やペレットストーブの販売などに携わりながら、ソイコティの製造・販売を一人で続けている。

「これを大きな事業にする道もありました。でも、『大量生産・大量消費』にしたなら、自分の築いてきたものがなくなってしまう気がして。ソイコティを通してつなげる縁を大切にしたいという点では、ぶれちゃいけないと思ったんです」

私生活では、身延町で出会った女性と2018年に結婚。目下子育てに奮闘中の新米パパでもある。

「改めて考えると、こうして自分の好きになった街に住めるって、けっこう贅沢。ずっと暮らしていくためにも、自分に合ったライフスタイルを実現していきたい。この街でなら、それができると思っています」



(右ページ) 焙煎した大豆の品質を、目視で一粒ずつ確かめていく(上段右)モットーは「貴重なあけぼの大豆を、捨てずにまるごと使うこと」。茶こしで濾してもいいが、そのままカップへ注ぐのがおすすめだ(上段左)富士川をバックにパチリ。「ここから眺める、港町のような身延の景色が大好きです」(下段)豆の状態や気温・湿度によって焙煎の度合いを変えるのが、おいしさの秘訣。浅煎りの「ナチュラル」はやさしい甘さ、深煎りの「ピター」はコーヒーに似た苦味が特徴だ

唯一無二の風土で醸す
「自然なワイン」を追い求める

南アルプス市

渋谷英雄さん

しぶたに・ひでお 1962年、東京都生まれ。心理カウンセラーとして活躍していた2011年に一念発起し、甲州市勝沼でワイン醸造の修行を始める。15年に南アルプス市へ移住し、ワイナリー「ドメーヌヒデ」を設立、代表を務める。



(右ページ)渋谷さんがつくるワインは、原則樽で熟成させている(上段右)ぶどうの樹が眠りについた冬も、渋谷さんは毎日畑に通う。樹と対話しながら、枝を丁寧に剪定していく(上段左)赤ワインと同じ製法で白ぶどうの果皮と果実を漬け込んだ、鮮やかなオレンジワインも人気がある(下段右)それぞれの樽には、収穫日や畑の名称、仕込みの状況など、「成長の記録」が刻まれていく(下段左)仕込みの間も、五感でワインの変化をとらえる。上質なワインづくりに欠かせない作業だ



「ワインづくりで自分を表現したい」 50代の新たな挑戦

南アルプス市小笠原にある、ワインレッドで彩られた平屋建の瀟洒な建物。ここが、渋谷さんのワイナリーだ。

「マスカット・ベリーA」でつくると赤ワインを中心に、年間1万2千本ほどを醸造しています。白ワインですか？うちではつくっていません。だって、僕が白を飲まないから(笑)」

少年のような澄んだ瞳と、みずみずしい笑顔でそう語る渋谷さんの経歴は多彩だ。大学卒業後に就職した航空会社では沖縄転勤に手を挙げ、管制官として慶良間空港に着任。24歳で空港長に就任した。ダイビングスクールのインストラクターなどを

経て、30代で大学院へ。臨床心理士の資格を取得してカウンセラーとなり、大学で教鞭をとりながら、多くの人の心の問題にアプローチしてきた。

心理カウンセラーは聞き役に徹するもの。自分の感情を表現してはいけない仕事だが、50代を目前にした渋谷さんにこんな思いがふつふつと湧いてきた。「人生の最後にもづくりがしたい。大好きなワインで、自分を表現したい」。

純粋な思いに突き動かされた渋谷さん。日本ワインの本場・勝沼のワイナリーに通い、醸造のいろはを学んだ。

約3年間の修行を終えるところで、自分の醸造所を立ち上げる決心をした。

「ぶどうを自分で栽培してワインをつくりたかったです。理想的な土壌と気候を求めて、全国へ足を運びました」

ワイン醸造に適するのは、水分が少なく引き締まったぶどう。「水はけが良く、雨の少ない土地であることが、栽培の必須条件となる」。

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりましたが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりましたが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりましたが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「ぶどうを自分で栽培してワインをつくりたかったです。理想的な土壌と気候を求めて、全国へ足を運びました」

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりましたが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

「北海道から山口県まで46カ所をめぐるりますが、なかなか納得できる場所がなかった。あるとき『うちの畑を見に来てよ』と知人に促されて訪れたのが、

美しい織物も、豊かな自然も。
必要だから、ここで暮らしたい

富士吉田市

藤崎仁美さん

ふじさき・ひとみ 1989年、愛知県生まれ。名古屋市のエンジニアリング会社で働いていた2016年、富士吉田市に移住。「宮下織物」に入社。織機のおペレシジョンなどを担当している。同じく「ターナー」移住者の夫と2人暮らし。

富士山の北のふもと、富士吉田市大明見地区。舞台衣装などの生地製造を手掛ける「宮下織物」の工場には、ガッツチャンガツチャンという機(はた)織りの音が響き渡る。

自動織機のそばに佇む藤崎さん。約1万1千本の糸からなる生地の隅々にまで目を凝らす。「織物はとてもデリケートです。乾燥した手で触れただけでも傷ついてしまう。とくに私たちが織るサテン地は、糸が細くて高密度。小さな傷も目立つので、細心の注意を払います」

この産地が得意とするのは、糸を先に染めてから織る織細な柄の生地。染色が済んだ糸を乾かして巻き取り、織機にかけ、糸の特性にあわせて機器を調整。仕上がりを絶えず確認しながら織っていく。どれだけ設備の近代化が進んでも、品質を担保するのは、やはり人の目と手だ。

祖母の布切りばさみが指し示した
織物の世界への道

「パトンが来たんだな、と直感しました。今度は自分がハサミを持つんだと思いました」

そこから、藤崎さんの「人生のドア」が次々に開いていく。最初は、偶然読んだブログ。大好きな富士吉田の織物の現状を知った。知人を介して宮下織物のデザイナー・宮下珠樹さんに出会い、工場を見学。この街の織物の魅力に触れた。草木染めと手織りの教室にも入学。毎週末通った。あのバンドの名前にも入った「fabric」(「織物」の世界に、みるみる引き寄せられていった。

「自然豊かな山梨で、美しい織物に関わっていききたい。それが自分の答えだとわかりました」
2015年の夏、再会した宮下さんから採用を打診されたときも、迷いはなかった。その年の11月、移住を果たした。

山梨で見つけた 生きている実感と ゆるやかな人間関係

未経験での転職。そして産地の伝統を受け継ぐという気負いもあり、悩むこともあった。寒さや積雪など、自然の厳しさも

富士吉田市は、ロックバンド「フジファブリック」を率い、2009年に急逝した志村正彦さん(享年29)のふるさとだ。藤崎さんはその翌年、市内で催された追悼ライブに参戦した。「もともと母がファンで(笑)。そのとき初めて山梨を訪れて、純粋に『いいところだな』と思いました」

2013年、地元の名古屋で社会人生活をスタートさせた藤崎さん。なかなか仕事を自分のものにできない時期が続いたが、年に一度訪れていたこの街の空気が救いになっていった。

「悩んでいる時も、ここに来るとすごく楽に過ごせる。富士山とそれを取り巻く自然、この街の人々に癒やされました」
富士吉田に不思議な引力を感じていた矢先、転職が訪れることになる。2014年、祖母が癌でこの世を去った。

「自分はどう生きていけばいいんだろう」。そんな問いが生まれ、形見の布切りばさみをふと手に取ってみた。洋裁が得意だった。それでも藤崎さんは、こんな確信を持った。「これは私に必要な暮らし。好きだから、ここにいたいんだ」

眼前に迫る富士山や、清冽な雪解け水、池の水面を彩る蓮の花。畑を駆けるキジに、湖を優雅に泳ぐ白鳥…。すぐそばにある自然と、共に生きている実感が、その思いを強くした。そして、輪に入ることを強いるでもなく、見守ってくれる地元の人々の存在も大きかったという。「ゆるやかなつながりが広がって、どんどんこの土地が好きになりました。自営業の人が多いせいか、『自分の人生』を生きている人にたくさん出会えて、すごく刺激になるんです」

2018年、1ターンのでやってきた夫と結婚。20年の春には、やはり1ターンの女性職人・柳原うたえさんが職場に加わった。経験豊富な彼女とアイデアを出し合い、さまざまな試作にチャレンジしている。

「キラキラしたものを手に取ると、ちょっとハッピーになりますよね。もっと多くの人に、そんな織物を届けたいんです」
そう言って笑う藤崎さんを、織機のリズミカルな音色がやさしく包み込んでいた。



(右ページ) 感覚を研ぎ澄ませて、生地の仕上がりを確認する(上段右)入社以来、工場ですべて一人で仕事をしてきた藤崎さん。忌憚なく意見を交わせる新しい同僚・柳原さんの存在は大きい(上段左)常に富士山と共に暮らす。自宅では綿花や藍を育て、草木染めや手織りを楽しんでいるそうだ(下段右)まばゆく輝く先染め糸。その状態を確認することも重要な工程(下段左)柳原さんをつくった、「見本織り」と呼ばれる試作品。新しい表現が次々に生まれている

山梨で叶えた理想の住まいで働き方をカスタマイズする

北杜市



(右ページ)南アルプスをバックにした田口さん一家。自然な表情からは、充実した暮らしを送っているのがうかがえる (上段右)家族4人、水入らずで過ごすひととき。遊びの幅も広がる (上段左)田口さんの仕事部屋。家の玄関とは完全に分かれているので、気兼ねなく商談もできる (下段右)家族揃ってのトランプは「子ども相手でも真剣勝負です(笑)」と田口さん。遠くで富士山が見守っている (下段左)心やすらぐウッドテイストのインテリア。静かな時間が流れる。

田口孝貴さん

たくち、こうき 1976年、東京都生まれ。都内の保険会社で営業マンとして勤務している。2017年、妻と2人の子どもを伴い北杜市に移住。20年6月には、同市内に仕事部屋付きの一軒家を新築した。都内の実家との2拠点で生活している。

車の試乗でたどりついた北杜市に魅了され、まずは「お試し移住」

「正面に富士山が見えるでしょう。あつちには南アルプス。振り返ると…ほら、あれが八ヶ岳です」

北杜市大泉地区にある田口さんの自宅からは、山梨を取り囲む山々が一望できる。360度、稜線がつながる大パノラマだ。この景色を田口さん夫妻が初めて目の当たりにしたのは、2014年夏のことだった。国産電動自動車の1週間試乗キャンペーン。2時間でどこに行けるか試そうと、まだ小さかった息子と妻の3人で、東京からクルマを走らせた。

「もともと海より山派。中央道を走って、気づいたらここまでたどりついていました」
標高1000mに迫るこの地域は、真夏でも東京とは別世界のような涼しさだった。当時は都内の中古物件に住んでいた田口さん。いずれここに、自分の

家を建てたい。そんな思いが芽生え、大きくなっていった。北杜市の子育て支援住宅に入居したのは、それから2年半後のことだった。

「やっぱり住んでみないとわからない部分があります。どうせ家を建てるなら、現地に住んでいけば土地探しもしやすいですから」

頼もしい味方になったのは、富士山が大好きな妻。かつてワーキングホリデーでニュージーランドに1年滞在した行動派だ。率先して入居手続きや準備に何度も出掛け、移住のお膳立てをしてくれた。

では、仕事はどうするか。

「職場の人間関係が良好なものも手伝って、移住はなんの問題もありませんでした。『週2回のミーティングには遅刻しないで』と言われてたきり(笑)。営業職ですから、きちんと結果を出すことができればいいんです」
朝一番の高速バスに乗ればミーティングには間に合う。東京の隣にある山梨だからこそ、移

住のハードルも低かったという。「長野もいいところですが、ちよっと遠い。アクセスの良さと自然の豊かさが両立できる、こんなに素晴らしいところはないなと思いました」

2拠点で始まった山々と共に暮らしたあたららしい暮らし

2017年、生活の本拠を山梨に置きながら、東京に泊まらなければいけないときは実家に滞在する2拠点居住をスタートさせた。

「最初は、こんな寒いところにどうやって住むんだろうと思いました(笑)。でも、家の中を暖めていけば大丈夫。都内では外を歩いて寒い思いをしますが、こっちはクルマの移動が多いです。雪だつて心配したほど降らないし、除雪の対応も早いので安心しました」

2019年、富士山と南アルプス、八ヶ岳が同時に見える土地をようやく手に入れた田口さん。自分の希望する家を設計してくれる建築家を探した。「子どもの頃ボーイスカウトをしていたので、昔から焚き火が大好き。薪ストーブは絶対入れたいと思っていました。そしてリビング、キッチン、お風呂か

ら富士の山姿を楽しめる家をつくりたかったです」

ネットで調べてたどりついたのは、市内のベテラン建築家。2020年の夏、待望のマイホームが完成した。

富士山を望むリビングは吹き抜けで、薪ストーブの煙突が天井まで伸びる。対面式のキッチン、そして2階に設えられた浴槽からも、霊峰の姿を眺められるよう工夫されている。

「希望は全部実現できたし、費用もリーズナブルでした。新型コロナウイルスの流行で、リモートで働く機会が増加するのを見据え、玄関とは別の扉から出入りできる仕事部屋もつくりました」

感染予防のため、この家に住み始めてからはテレワークがメイン。北杜市周辺の営業活動をする機会が増えた。商工会青年部を代表して、関東ブロックの「主張発表大会」に出場するなど、地域でも大活躍している。

「この仕事が好きですし、一生続けたい。場所にとらわれず働けるよう、工夫を重ねています」
家のそばの木々にはリスが駆けめぐり、大空には鷹が悠々と羽を広げる。高原の澄み切った空気の中で暮らす田口さん一家には、今日もたくさん笑顔が生まれている。

やまなし暮らし支援センター

山梨県への移住や二地域移住を考えている方の様々な相談に対応する相談窓口です。住宅・生活・就職など、やまなし暮らしに必要な情報を提供いたします。

〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-10-1
東京交通会館 (NPOふるさと回帰支援センター内)
TEL : 03-6273-4306
E-mail : yamanashi@furusatokaiki.net



ふるさと山梨定住機構

山梨県への移住やUターン就職を希望する方に対する情報提供や移住後の支援を行っています。2名の専任コーディネーターがご案内いたします。

〒400-0035 甲府市飯田1-1-20 JA会館5階
TEL : 055-244-7980
E-mail : teijyu@pref.yamanashi.lg.jp



やまなし移住定住総合ポータルサイト

山梨県への移住・Uターンを考える方々に必要な情報をお伝えしていくサイトです。各市町村の特徴・暮らし子育て・しごと・住まいなど移住を始める方に気になる情報や移住を体験できるイベント情報をお伝えしていきます。



デュアルでルルル♪

TOKYO FM 毎週日曜 8:30~8:55
ライフシフトのヒントを、山梨からお届けします。働き方も、学び方も、結婚も、子育ても、いまがシフトのタイミング。暮らしをシフトするために知りたいキーワードを、毎週ひとつ、やさしく学んでいきます!



TRY! YAMANASHI 特設Webサイト

山梨県の二拠点居住の魅力を伝える特設Webサイト。山梨県での二拠点居住実践者のリアルな生活をスペシャルムービーで公開中。「山梨は、挑戦に近い。未来に近い。」山梨県が二拠点居住に適している理由をお伝えします。



みなさんの夢の実現を
山梨県が
お手伝いします



P6~7 幡野さん
身延町



P4~5 田中さん
大月市



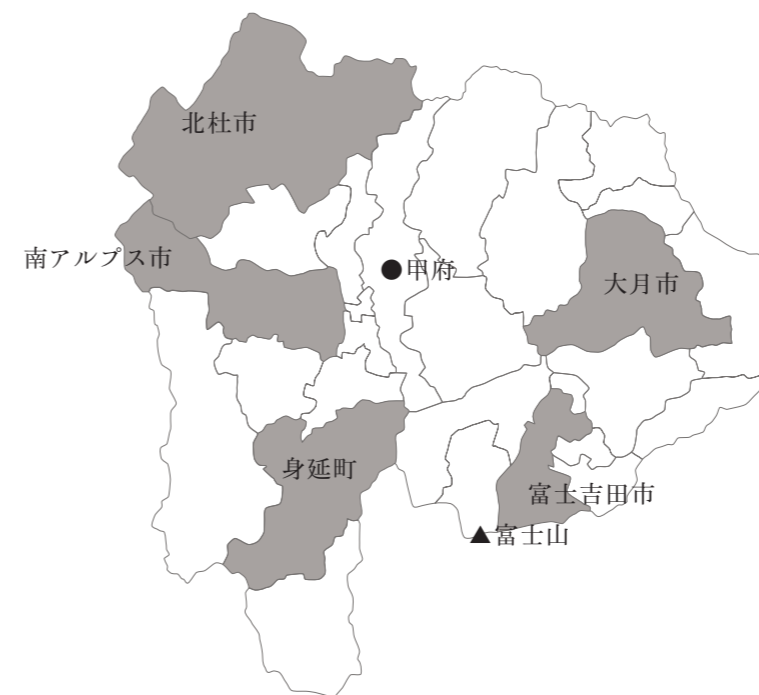
P12~13 田口さん
北杜市



P10~11 藤崎さん
大月市



P8~9 渋谷さん
南アルプス市



今回訪れた
市町村